

修士課程

『防災政策プログラム 水災害リスクマネジメントコース』 実施報告



防災政策プログラム学生 集合写真（平成 20 年 9 月 17 日）

ICHARM は、平成 19 年 9 月 30 日から平成 20 年 9 月 19 日まで約 1 年間、(独)国際協力機構(JICA) および政策研究大学院大学 (GRIPS) と連携し、標記修士課程コースを実施しました。

当初 11 名の学生でスタートしましたが、最終的に、学生 10 人（中国 3 名、バングラデシュ 2 名、ネパール 1 名、インド 1 名、日本 3 名）全員が無事に審査に合格して『修士（防災政策）』の学位を授与され、めでたく本コースの第 1 期生として本国へ帰国しました。

本コースの特徴としては、1 年で修士号を取得できること、学生が自国で実際に抱えている問題の解決策を提案できる能力を向上させる『課題解決型』の研修であること、及び『理論より実務』を重視する研修であることなどが挙げられます。

それらの特徴を反映させるために年間カリキュラムでは、まずコース前半で講義・演習を集中的に実施しました。

内容としては「防災政策」、「災害リスクマネジメント」、「水文学」、「水理学」などの理論・基礎面だけでなく、「統合洪水リスクマネジメント」、「ハザードマップ作成及び避難計画」、「ダム工学」、「砂防工学」「国際協力」などの実務的な講義・演習も実施しました。特に平成 19 年 11 月は、「ハザードマップ作成及び避難計画」の講義・演習を、ICHARM が JICA 研修として実施している「洪水ハザードマップ作成」コースと共同で実施しました。生徒数は両コース合わせてバングラデシュ・カンボジア・中国・インド・インドネシア・日本・ラオス・マレーシア・ネパール・フィリピン・スリランカ・タイ・ベトナムの 13 ヶ国から、合計 30 人にもなり、これほど多くの国籍の学生が一堂に会して授業や演習を行うことは、両コースの学生にとって大いに刺激になったと思われます。



「洪水ハザードマップ作成」コースとの合同授業



福岡教授（中央大学）による講義風景

また、コース後半では各学生がそれぞれの国での水災害に関する課題解決に資するための修士論文作成に十分に取り組めるよう配慮するとともに、日本の治水対策についてより深く学ぶために、斐伊川・太田川を含む中国地方現地視察（平成 20 年 3 月）、環七地下調整池や鶴見川遊水地、多摩川などの首都圏の洪水対策現地視察（平成 20 年 4 月）、鬼怒川ダム統合管理や日光・足尾砂防現地見学（平成 20 年 5 月）、芋川・信濃川・立山砂防・磐井川（岩手宮城内陸地震で被害を受けた）や北上川の一ノ関遊水地などの現地視察（平成 20 年 9 月）など、日本を代表する河川の現地見学を実施しました。



鶴見川遊水地見学



磐井川河道閉塞現場見学

学生は、不慣れな日本での長期間の生活に苦勞しながらも、真剣に講義・演習に取り組み、修士論文作成過程では ICHARM 棟内の学生部屋に籠もり、ICCHARM の研究員から適宜有用なアドバイスを受けながら論文を作成しました。平成 20 年 8 月 22 日に行われた修士論文の発表会では 1 年間の成果を各自披露しました。

論文作成を通じて、学生の知識が豊富になるばかりでなく、ICCHARM にとっても学生との関係が緊密になり、学生を通じたこのような国際的なネットワーク形成活動は、今後の ICHARM の活動にも大いに役立つものと思われます。

平成 20 年 9 月 17 日には、GRIPS にて学位授与式が、続く 18 日には JICA 筑波にて閉講式が行われました。本コースで最も優秀な成績を修めた者に贈られる”Outstanding Award”は、ネパールの Mitra 氏に授与されました。

このコースの目的としては、社会的要請に必要な最新の技術を持ち合わせている専門家を養成し、その結果、一国の計画における災害マネジメントの重要性を彼らが政策決定者に提示することができるようにすることを掲げていましたが、一朝一夕に出来るものではなく、帰国後も継続してフォローアップを行う必要性を感じています。

本コースは昨年度立ち上げたコースですが、大きな問題もなく無事に終了することが出来ました。最後になりましたが、本コースを実施するにあたり、多忙な中講義や演習を行って頂いた各大学の先生方及び行政の方々、現地視察を快く引き受けて頂いた国土交通省事務所ならびに市町村の方々や住民の方々に厚くお礼申し上げます。



修士論文発表会



学位授与式



”Outstanding Award”授与